

【茶室プロジェクト】京都市立芸術大学に茶室の進捗状況の取材に伺いました！

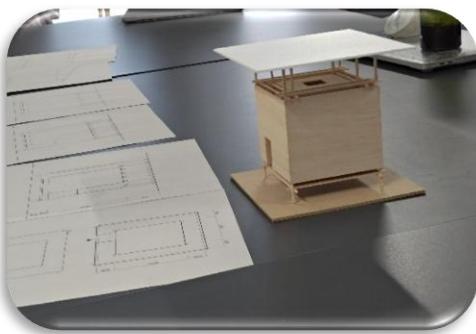
きょうとまるごとお茶の博覧会学生プロジェクトの京都府立大学3回生の寺澤です。

8月22日(金)に、京都市立芸術大学へ茶室プロジェクトの進捗状況を取材しに伺いました！そこで、

ゼミ生のみなさんによる茶室デザインの発表を伺うことができました。

今回はその様子をレポートします！

全部で8作品拝見しました！



1つ目は、壁の厚い茶室です。

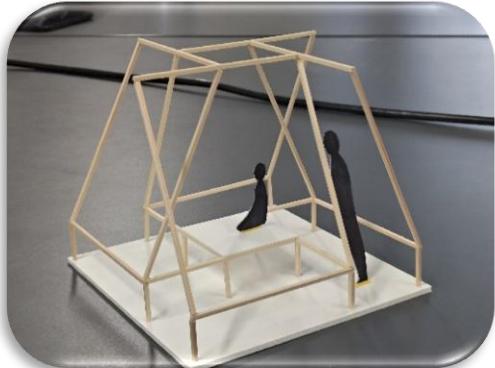
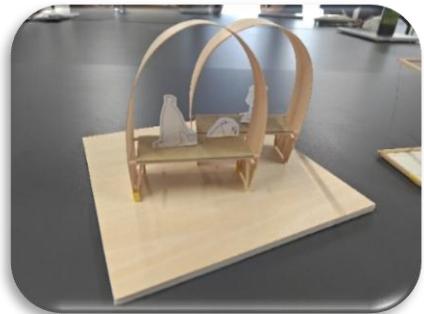
床と壁の間に隙間があり、足元から入り込む光にこだわりをもっておられました。

壁を分厚くすることで、外界から閉ざされた秘密の空間が生まれ出されるのではないでしょうか。

2つ目は、向かい合う茶室です。

一人一人の空間が確保されながらも、亭主と客が向かい合って座ることで、役を入れかえて互いにお茶を点て合うことが可能となっています。

写真では2人分の空間しかありませんが、空間を4つ、5つ…と繋げていっても面白いという意見が出ていました。



3つ目は、遊具のような茶室です。

亭主は真ん中に座り、客が四方から自由に入れられるようになっています。外枠に腰掛けることができるため、正座をしなくてもよく、気軽にお茶を楽しめるように感じました。

4つ目は、水面の映る茶室です。

天井が透明な入れ物のようになっており、中に水を入れておくことで、茶室内に水面を通した光が降り注ぐ、神秘的な空間が生まれます。水の動きに伴う光の揺らぎが自然を表現することにつながると語っておられました。



5つ目は、土管のような茶室です。

客は1mほどの深さの穴に入り、プライベートな空間でお茶を楽しむことができます。様々な形の穴があるため、自分好みの空間を見つけることができそうです。



6つ目は、合わせ鏡の茶室です。

土台に蓋をするような形になっています。蓋部分の壁が地面から浮いており、隙間から入り込む光がカーブのかかった天井に反射して広がっていくようです。



7つ目は、中庭のある茶室(写真左側)です。

茶室の中央に中庭が置かれ、正午になると天井の隙間から入る光がちょうど中庭にあたるように工夫されています。天井の高さが、その空間の主人(亭主)が客に対する敬意を表現するかが反映されることから、空を隠しつつ光が等しく降り注ぐように考えられていました。お茶会のテーマを「宇宙」「世界」と設定されていました。



8つ目は、球体の茶室です。

球の中でお茶を飲みたいというアイデアから生まれました。見た目がとても可愛らしいです。今回の作品の中で、唯一窓が設けられていました。

縁側のようなものがあり、くつろげそうです。

作品の評価にあたり、開放的・閉鎖的、複雑・単調、伝統的・斬新的、制作難易度など様々な観点から検討されておられました。実現可能な範囲でよりよいものを生み出そうとする姿勢をものすごく感じます。ゼミ生のみなさんの中には、毎週のゼミの度に作品が変わっていったという方も多くいらっしゃったようで、今回の茶室プロジェクトに向けた熱意を感じました。

作品を拝見していて、窓のある作品が一点しかなかったことが非常に印象的でした。従来の茶室と言えば、障子から光を取り入れることが非常に多いところ、今回は天井や床の隙間から間接照明を取り入れる工夫をされている方が多く、新しい茶室の可能性を感じました。斬新なアイデアばかりでとても刺激的な時間になりました。

「囲むということは、領域を作るということ。」
これからどんな領域が生み出されることになるのか、とても楽しみです。

京都市立芸術大学のみなさん、関係者のみなさん、本当にありがとうございました。

